

大阪中学選手権（7/24・25 万博）RESULTS

- 「今年の夏は涼しい！」と感じていたのだが、夏のお天道様は黙っていなかった。全国大会参加標準記録突破のための指定大会、共通の部の近畿大会出場者を決める大会、そして全国大会のリレー代表チームを決める大会、さらには大阪陸上最強チームを決める学校対校戦でもある大会。この夏の大勝負の舞台に、例年どおり容赦なく猛暑を与えたのだ。気温は体温を上回る37度。タータントラックやスタンドのコンクリート上では40度近い気温になっていたはずだ。タータントラックが熱すぎて、クラウチングスタートの姿勢で静止できない。選手はあらかじめ用意されていたバケツの氷水に手をつこんでから位置につく光景となった。このきびしい暑さを制し、誰よりも勝利に対してどん欲な者が勝者となる権利を得るのだ。毎年の光景ではあるが、身の引き締まる思いで勝負のこの時を迎えたのである。
- 大会初日。低学年女子4×100mリレー決勝。2組4レーンに東雲。この種目には大勝負を賭けていた。地区大会で大阪大会の切符を得たときのメンバーは第1走者から順に西尾、畠山、堀、亀澤のオーダーで53秒86。通信大会では急成長した1年生の小澤を第3走者に抜擢し、その記録を53秒39までに伸ばしていた。それでも近畿大会出場のためには52秒台の記録が必要と考え、大きな決断をしたのだ、共通リレーで使っていたともに2年生の第3走者の西川、第4走者の畑田を低学年リレーに起用するに至ったのだ。西尾や亀澤にもこの起用について、ていねいに説明して西尾は共通リレーの第3走者にまわることとなった。そして迎えた本番の予選。予想どおり52秒96の今シーズンチームベスト。全体でも平田52秒52、咲くやこの花52秒93に続いて3番目の記録で順当に準決勝に駒を進めたのである。スターターのピストルが鳴って、第1走者の西川が勢い良く飛び出す。バトンはきれいに第2走者の畠山に渡る。予選のレースでは後半、肩を揺さぶり失速していたイメージがあったが、そのあとの指示を守り予選とは段違いの走りであった。バトンは第3走者の小澤へ。小柄でまだまだ細身の小澤であるが効率の良い接地で曲走路をぐんぐん前に出る。第4走者の畑田がマークを見てまっ先に飛び出した。バトンが渡るとそのままホームストレートを気持ちよく走り抜けて行った。1着。52秒33。今シーズンランキングトップの記録で、準決勝をトップ通過したのである。レース後、4人は大喜びしていたが、ここで嬉しさを爆発させてはいけなことは、こちらが指摘するまでもなく、選手たちもよく心えていたように感じていた。決勝に向けて、とにかく気持ち良くレースにのぞませたかったので、指示はできるだけ簡潔にした。

17時45分。低学年女子4×100mリレー決勝。こ



の時間帯になると、いくぶん暑さもやわらぐ。残すはこの種目と、全国大会出場が決まる共通女子4×100mリレー決勝のみとなった。今までこの時間帯に何度も胸がはりさけそうになるような激戦をくぐり抜けてきた。共通リレーのときのプレッシャーほどにはないにしろ、やはりかなりの緊張感でこの時を迎えることとなった。スタンドからは早くも「しのめ〜」の大応援、選手ひとりひとりの名前を大声で呼んでいく。3年生女子たちのリーダーシップがいつもながらに心にしみる。3レーンに東雲、そのすぐ外側の4レーンに優勝候補筆頭の平田。5レーンに準決勝で52秒34と2番目の記録で通過した豊中十四、6レーンには楠葉西。このチームも共通リレーから低学年リレーにシフトしてきたチーム。咲くやこの花が8レーン、力のある1年生がそろそろ枚方長尾が2レーン。スターターの「ON YOUR MARKS」の声でスタジアムが静まりかえる。スターターのピストルが鳴って、8人の第1走者がきれいにスタートを切った。西川と平田の第1走者の走りに大きな差はなかった。バトンは第2走者の畠山へ。ここでバトンがツータッチ。あわてて畠山が走り出す。流れが悪くなってしまった。バトンは第3走者の小澤へ。曲走路を軽やかなピッチで走り抜けるが先頭には追いつかない。混戦の中、第4走者の畑田にバトンが渡る。ホームストレートを疾走するが、明らかに3番手争いとなってしまった。平田が真っ先にフィニッシュラインを駆け抜けて51秒99で1着。楠葉西のアンカーがそのあと両手を広げてフィニッシュ。2着で52秒44。3着は咲くやこの花か東雲か。そのあとの電光掲示板のリザルトを見て息を呑んだ。3着咲くやこの花で52秒57、4着東雲52秒58、わずかに100分の1秒差で近畿大会出場を逃したことになる。肩を落として涙する4人のリレーメンバー。わかっていたこととは言え、勝負はあまりにも非情であった。急造のリレーチームただだけに、4人を責めることはできない。このリスクをわかっていながら勝負を賭けた。そして予定どおりのタイムを準決勝で出した。そのタイムが決勝につながらなかったから負けた。この結果のすべては指導者である自分自身にあることを噛みしめた。



- 大会2日目の低学年男子リレーにも勝負を賭けていた。こちらでも地区大会で使った第1走者の永井と第4走者の塩見をそれぞれ砂田、森田に変更して勝負に出たのである。第2走者には先の通信大会1年100mで優勝した絶対的エースの小森が控える。正直に白状すると、昨日の女子の結果が悔しくて仕方なかった。昨夜はほとんど眠れなかった。男子リレーでリベンジを！という強い決意でのぞんでいたのだ。男子低学年リレー予選で東雲は今シーズンチームベストの48秒03。予選全体では枚方247秒57、片山47秒86に次いで3番目の記録、4番目に咲くやこの花が48秒47と続く。地区大

会では48秒63、第4回記録会では48秒44のチームが、この大事な本番で48秒03まで記録をあげたのだから、女子同様調整は間違っていないはずだ。迎えた準決勝、1組4レーンに東雲、5レーンに地区大会でも負けている片山、そして今シーズン記録上位の咲くやこの花。スターターのピストルが鳴って、砂田が勢い良く飛び出す。砂田はバトンを持つと個人の走力以上の走りをみせてくれる頼りになる第1走者である。バトンは第2走者の絶対的切り札、1年生の小森にバトンが渡る。このバックストレートを小森はぐんぐん前が出る、第3走者は中司。小学校時代から小森とリレーを組んでいるので息もぴったり。きれいに手があがってしっかりとバトンをもらう。中司は曲走路を正確なピッチではしる。やや差がつまりながら、第4走者の森田へバトンが渡る。このテークオーバーゾーン内で咲くやこの花のアンカーが先行した。森田と競るように片山のアンカーもホームストレートを走り抜けていった。1着、咲くやこの花47秒65、2着に片山47秒72、そして3着に東雲47秒74。またもやチーム新記録である。準決勝全体では2組で走った枚方二が47秒34の記録で頭ひとつ抜けている。東雲は4位通過で決勝進出を決めたのである。

2日間の熱戦を繰り広げた大会もファイナルを迎えることとなった。15時20分、低学年男子4×100mリレー決勝、そして共通男子4×100mリレー決勝。むずかしい勝負になることを覚悟した。東雲は一番外側の8レーン。きびしい勝負になるだけに、外側のレーンでまわりを気にせずに自分の走りに集中したい。スターターのピストルで8人の走者が夢に向かってきれいに飛び出す。第2走者の小森が猛チャージしてトップに迫る走りを見せる。第3走者の中司で何とかその位置をキープしたい。第4コーナーのテークオーバーゾーン。ここで第4走者の森田が飛び出せない、躊躇しながらスピードを緩めたままバトンをもらう。ホームストレートを懸命に駆け抜けるが、このレースでも4着になってしまったことが遠くからでもはっきりとわかった。1着枚方に47秒14。2着に咲くやこの花47秒26、3着に片山47秒68。そして東雲が4着で47秒91。低学年リレーは1年生の第3走者と2年生の第4走者のバトンパスが鍵となる。互いのスピードに開きがあるので、常にオーバーゾーン失格のリスクがある。東雲でもこの区間の失敗を避けたいために何度も指導していた。これ以上は言い訳になってしまうが、簡潔に言えばこの区間のバトン練習をもう少しやりたかったのだが、最後の1週間、個人の走りの調整を優先する判断で追いこめなかったのである。思い返せば、昨年の男子低学年リレーも100分の2秒の僅差で4位。このときの第3走者はこの森田であった。一番取ってはいけない順位が4位。自分の指導力の未熟さを恥じた。



○ 2年生の男女ハードラーが明日へつながる素晴らしい走りを見せた。大会初日の110mYHでは、堀本が予選から快走した。追い風2.3mながら15秒66で順当に準決勝に駒を進めた。迎えた準決勝。3組あって各組2着プラス2名が決勝進出の条件。この準決勝進出者の中に2年生はふたりだけ。この堀本と先の通信大会の四種競技で7位入賞した神原である。準決勝2組。シードレーンの6レーンに堀本。持ちタイム的には2着に入るのはきびしい。3~4着に入ってプラスで拾われる可能性を追い求めたい。ゴール付近で彼の動きを見守った他。スターターのピストルで躊躇なく1台目のハードルに飛びこんだ。2台目以降、リード足をたたきつけながら、次々とハードルを越えていく。14秒台の記録を持つ2名とはインターバル9.14m間の刻みのスピードが違うが、何度も白熱したレースを体験するごとに堀本の刻みも少しずつ早くなっていることに気づいた。そのままなだれこむようにフィニッシュ。15秒70。追い風1.0m。5着。準決勝敗退が決まった。「この大舞台のむずかしい競り合いの中で自分のハードリングをやり切ったことが大きな収穫。立派なレースだったよ」と、彼に伝えた。ほんの少し安堵（あんど）したようすを見せたあと、彼は深々と頭をさげた。この選手をジュニアオリンピックに出場させて、日本の中学2年生とガチンコで勝負させてやりたいと強く思った。



大会2日目の女子100mJHで大きな見せ場を作ったのが亀澤である。予選では15秒40の記録で自己ベストをあっさり更新。迎えた準決勝。中学女子ハードルは大阪のお家芸とも言える種目である、毎年、多くの選手がこの種目で全国大会に出場して活躍している。（昨年は全国最多の9名が出場。豊中14中の中司選手が日本一になっている!!）1組8レーンに亀澤が登場。5レーンには全国の優勝候補のひとりでもある花園中の坂東選手。亀澤も果敢に1台目のハードルを飛び越えていく。軸がぶれずにリード足を素早く振り下ろしていく。10台目をこえても懸命に前を向いて走り抜いて行った。電光掲示板のリザルツの表示を見てびっくりした。4着で準決勝敗退が決まるものの、15秒13。追い風2.0m。ふた昔前の全国大会参加標準記録（15秒14）を上回る素晴らしい記録であったからだ。続く2組で、同じ2年生の豊中14中の川中選手が14秒90と、ジュニアオリンピック参加標準記録を突



破した。亀澤は9月のジュニアオリンピック挑戦記録会で14秒90以内で走らなければ、ジュニアオリンピックに出場できなくなったが、むしろこのことを前向きにとらえない。この高い参加標準記録を突破することは、同大会の入賞レベルにあるということである。堀本と同様に、日本の中学2年生と勝負するために横浜に乗りこむべきである。今はっきりしていることは、現段階では昨年ジュニアオリンピックAクラス8位入賞、全日本室内陸上優勝の村上瑞季よりも記録のレベルが高いということである。

- 四種競技では2人の3年生が健闘した。男子キャプテンの植田航太は肉離れの故障を治して何とか間に合わせて今大会にのぞんだ。先の通信大会では2年の神原が7位入賞しているだけに、それ以上の成績をあげて入賞、チームに得点をもたらしたいと思っていたはずだ。圧巻だったのは最終種目の400m。通信大会とは違い、一日で4種目をこなすハー



ドな日程。酷暑の中をものともせず前半から積極的にとばしていったのだ。見る者まで熱くなるような魂のこもった走りでフィニッシュ。56秒48の自己ベストで541点を積み重ね見事に8位入賞を果たした。神原よりも21点高い1983点も3年生の意地ではなかったか。

一方、先の通信大会で女子9位であった加藤。走り高跳びで1m49、砲丸投げで9m53の自己ベストを連発。またもや、3種目を終わって4位につける。最終種目の200mでは向かい風1.6mの中、29秒75に何とかまとめて総得点2192点の自己ベスト。悲願の7位入賞を果たしたのである。通信大会の悔し涙を乗り越えからこそ、今回の入賞がある。つくづく立派な選手になったものだと感心した。



- 女子1500mに出場した木下も通信大会のリベンジを果たしたひとりである。通信大会の予選では4分51秒92の好記録で順当に決勝進出を果たすものの、決勝では4分52秒93の記録で10位に終わっていた。通信大会では記録上位者で番組編成されるが、選手権は対校戦。予選も各自の持ち記録で均等に番組編成される。木下は2組。全部で3組あって各組上位4着プラス3名が決勝進出となる。このことを理解しながら、木下は前半から積極的にとばす。彼女の積極性はいつ見ても気持ちがいい。最後はトップ集団に位置しながら4分54秒94の4着でゴールした。

大会2日目。共通女子1500m決勝。すでに全国大会参加標準記録を突破した選手が4人。近年になくレベルの高いレースになることが予想された。スターターのピストルが鳴ると、全国大会の優勝候補筆頭、大阪薫英女学院中の高松智美ムセンビ選手がするすると前に出て独走となる。木下は標準記録突破者3名を含む第2集団を形成。やがて、その3人が離れて前に出ていくが。そこからも粘りの走りを見せた。ラスト1周の鐘が鳴って苦しそうに顔をゆがめるが、少しでも前へという闘志は決して衰えることはなかった。7位でフィニッシュ。4分51秒08。この大事な決勝レースでわずかであるが自己ベストを更新しての入賞である。レースが終わると彼女はいつものように珠のような汗をぬぐいもせず「(今の私の)レースどうでしたか?」と聞きに来る。スタート前も同じでいつも自分のところに歩み寄ってくる選手である。強くなりたいのだ。そう純真に願って頑張ることができる選手を日々指導できる。指導者としてこんなに嬉しいことはない。来年こそ、全国へ。彼女を北の大地(北海道)でめいっぱい走らせてやりたいと強く思った。



- 共通女子リレーチームが準決勝敗退した。今大会のオーダーは1走から順に緒方、山本光菜里、西尾、平岡のオーダー。今シーズンの東雲共通リレーのチームベストは51秒20。これまで4年連続して49秒台(11年、12年は48秒台)を出してきたチームただけに力不足であったことは否めなかった。100m13秒4前後には2年生の山本光菜里、畑田、西川の3人。さらに13秒台となると3年生の平岡、緒方、そして2年生のハードルパートの西尾、亀澤となる。これまでにこの7人でいろいろなオーダーを組んで戦って来た。おそらく10とおりに近いオーダーがあったのではないか。この選手権では低学年リレーに重きを置くチーム戦略ではあったが、それでも共通リレーも何とかファイナルチームにという思惑があった。通信大会から2名の選手が入れ替わったの出場となったが、この準決勝では51秒40までに記録を伸ばして敗退したのだ。レース後のリレーミーティングでは緒方の涙が止まらなかった。女子キャプテンの平岡も泣いていた。3年生2人の涙には、最後の夏に賭ける強い思いがあったことを物語っていた。彼女らは、先輩たちがこの女子リレーで数々の修羅場をくぐ



り抜け戦い切り、たくさんの感動のドラマが生まれてきたことをいつも間近で見て来たのだ。それだけに、今回の結果に複雑な思いが交錯したことでしょう。思い通りに記録が伸びず思い悩んだ日々があり、120名の部員を抱えるチームをまとめるのも並大抵のことではなかったことでしょう。本音で言えば、同じ3年生だけでリレーを組みたいと願ったこともあったはず……。それでも、一切弱音を吐かず、愚痴もこぼさず、言い訳もせず、チーム最優先でがんばってきた彼女ら3年生。彼女のがんばりを讃えてやりたいし、こんな素晴らしい選手が東雲にいることを誇りに思っています。彼女らの中学陸上はまだ終わっていない。きびしい夏の練習を乗り越えて、大きな実りの秋を迎えたい。さらには、彼女らのがんばりがチームの伝統となることは間違いない。君たちが先輩たちを見ていたように、後輩たちもしっかり君たちを見ているに違いないからだ。

♪ 夢輝け！東雲中学!!

しののめブルーの超特急～♪

